

速記録 (平成十一年一〇月二十九日 第二九回口頭弁論)

事件番号

平成四年(ワ)第二〇七五号・平成五年(ワ)第二二二五号・平成六年(ワ)第二三

〇八号

本人氏名

金 ■ 天

原告ら代理人(松本)

甲B第四一号証を示す。

この調査票は一九九七年一月一八日付けで作成されていますが、これは、あなたが浮島丸事件について質問を受けて、回答をして、金起憲さんに代筆してもらったものですね。

はい、そうです。

ここに書いてある金起憲さんというのは永同新聞の新聞記者ですか。

はい、そうです。

あなたは、一九二二年六月四日、朝鮮の忠清北道永同郡で生まれましたね。

はい、そうです。

農業をしていましたね。

はい、そうです。

結婚は、いつ、されましたか。

日本に来る一年前のことです。

そうすると、結婚して一年後に、日本に来るようになったわけですね。

はい、そうです。

そのときのことを伺います。調査票によれば、徴用令状を受けて日本に連れていかれたということですね。

はい、そうです。

そのとき、あなたのお名前なんですけれども、日本名を使わされていませんか。

徴用で来てからは、すべてが日本名を使いました。

あなたは、当時、日本名で何というふうにな乗っていらっしゃいましたか。

永山 ■■ 天（ながやま ■■ てん）です。

永山 ■■ 天という名前は、いつから使うように言われてましたか。

創氏改名があつて、それから永山■天という名前を使うことになりました。特に、夜の勉強会とか、学習会、日本語の教育などでは、必ずそれを使うようになってました。

創氏改名、これは何歳のときか御記憶ありますか。

一五歳前後だと覚えております。

先ほど、夜の勉強会とか、学習会という話が出ましたけれども、それは何を学習、勉強するんですか。

学校教育を受けていない人が多かったです、その人たちを対象にして平仮名とか片仮名の教育をしました。

その中で、あなたは日本人なんだというような教育もあつたんですか。

そのような教育はそのときは受けておりません。

何か講習会で日本人だというような教育を受けたというようなことはありませんか。

講習会ではそういうことはなかったんですが、行政機関からは、いつも内鮮一体、あなたたちは皇国臣民だということを言われました。

神様の印を東側に付けて、それを見て拝んだりするように指示されました。

神様というのは、これは天皇のことなんですか。

天皇陛下のことです。

先ほどの徴用令状の話に戻りますが、徴用令状をだれが持ってきましたか。

それは、町役場の役人が持ってきました。

その人は、令状を持ってきたときに、何と言って持ってきましたか。

この令状は期間が短い、で、いずれ軍隊には行かないといけないので、これならば簡単だよと言われました。

まず、海軍だとか、陸軍だとか、そういうことの話は出ませんでしたか。

役人の人が日本海軍の軍属だということだけは言ってくれました。ところが、どこに行くか、どんな仕事をやるかは聞いてませんでした。

期間が短いという話もされたということですが、具体的に一年とか、

三箇月とか、六箇月とか、そういうような話は出ませんでしたか。

そのときの一般的な認識によれば、六箇月になるという話でした。

それは、令状を持ってきた人が六箇月くらいだろうというふうに言ったということですか。

令状を持ってきた人も六箇月と言っておりました。

徴用令状を受けて、その後、まず、どこに行きましたか。

永同郡の町役場に集まりました。

そこで、だれから、どんな説明を受けましたか。

集まったときの話はちゃんと覚えていないんですが、とにかく、日本に行くという話でした。それから、旅館に行くように指示されました。

日本に行くということなんですけれども、そのとき、金さん自身の気持ちとして、自分は朝鮮人なのに、なぜ、日本の海軍の軍属として日本のために行かないといけないのかというようなことは思いませんでしたか。

箇月だという、期間が短いということもありまして、そして、当時、日本に出稼ぎに行く人も多かったので、新しいところに行ってみると
いう気持ちも少々ありました。

そのとき、自分は日本人だからというような思いもありましたか。

当時は、内鮮一体だというふうに、みんなが教育されて、そういう
ふうに思われてましたので、当然のこのように思っておりました。
その後、金さんは釜山に連れていかれて、船で日本の下関に渡って、下関か
ら青森まで連行されたということでもいいですか。

はい、そうです。

最終的には青森のどこに連れていかれましたか。

下関から乗るときから、憲兵の人たちが二列に並んで、すごい厳
しい態勢だったので、どこに行くかも分からなかったですし、青森
に着くまでは特にどこだというのは全く知りませんでした。

結局、青森のどこに最終的に行きましたか。

最終的に着いたところは青森県の古牧駅前でした。

そこから、三沢に連れていかれたということになるわけですか。

駅に降りたらば、軍用トラックが数十台そこに用意されてまして、そこに乗れと言われまして、乗っていきました。

それで、最終的に三沢に行ったということはいいんですよね。

三沢の工員宿舎か何かというところに行きました。

あなたと同じように、朝鮮から三沢に連行されてきた人は何人ぐらいいましたか。

一緒に行ったのは五〇〇人はいると思います。五〇〇人というのは、同じ忠清北道から一緒に行った人数が五〇〇人です。

ほかからの人も合わせると何人くらいということになるんですか。

多分、朝鮮人はそれだけだったと思います。ほかに、東京から日本人の部隊が来たりしました。

三沢における生活について伺います。三沢には海軍の飛行場があったんですか。

一緒にいました。ただ、海軍の幹部たちがそこに来てました。

三沢に海軍の飛行場があって、そこで働いたんですね。

ええ、海軍飛行場で働きましたけれども、その周りの道路を作る仕事をやりました。

道路を作るというのは、具体的にどんなことをしましたか。

飛行場の外を、飛行機が一周して、また入ったり出ていたりするような道でした。

それを作るというのは、具体的に掘り起こしたりするわけですか。

その道路を作ろうとしたのに、そこに松の木がいっぱいあったので、まず松の木を切って、その根元まで全部掘り起こすような作業をしました。

そのような作業をしてるのは、金さんのように朝鮮から連れてこられた人たちだけでしたか。

その仕事をやるのは、ほとんど朝鮮人だったんですが、一部日本人もいました。その日本人は、同じ仕事じゃなくて、それとちよつと

違う仕事をしていました。

金さんたちは何時ごろから何時ごろまで働きましたか。

朝六時に起床して、朝御飯を食べて、朝六時三〇分に朝会がありました。朝会の後すぐ仕事に投入されました。

何時ごろまで働きましたか。

仕事は午後六時に終わります。

そこで、作業の監督をしたのは日本人ですか。

ええ、日本人です。

監督は作業をしてる人たちに暴力を振るったりもしましたか。

ええ、もちろん、たくさん知っています。

どんなことを知っていますか。

蹴ったりする場合もありましたし、精神棒で殴ったり、拳で殴ったりする場合もたくさんありました。それで、暴力を受けて鼓膜が破れたり、私の知り合いの中では歯が全部抜けた人もいました。

我々の一行は、間違いなく六箇月後は朝鮮に帰れるんだというふう
に信じていましたし、それで一生懸命働きました。

ところが、六箇月で帰ることはできませんでしたね。

もちろん六箇月後に帰れませんでした。ちょうど六箇月という期間
が過ぎたときに、我々は朝鮮に帰れるんだと思って荷造りをして待
ってましたら、その日は、日本人の憲兵が数十人来てまして、おま
えらは交替がないので、今すぐは帰れないと、交替が来るまで、こ
の仕事を続けなさいといけないんだと言われました。

当然、がっかりしましたよね。

そうです。

三沢で働いていた当時ですけれども、あなたは、自分は朝鮮人なのに、どう
して、ここまで働かないといけないのかというようなことは思いませんでし
たか。

監督から、今、戦争中なので一生懸命やらないといけないと言われ
てまして、そういうことを考える余裕ありませんでした。

朝、何か参拝をしたりすることもありましたか。

特に朝鮮にいるときみたいに参拝をすることはなかったんですが、朝の朝会のように黙禱をしたことがあります。毎日です。

具体的にはどういようなことをするんですか。だれが、何を言って、黙禱をするんですか。

黙禱の中身は、戦争に必ず勝たないといけないとか、天皇陛下に対するものだとかということがあります。

あなたとしては、三沢で働いていた当時、自分は日本人だという気持ちはありましたか。

我々は、そこで働いてたときに、周りに日本の農家の人もいましたけれども、内鮮一体というのをうたわれてましたので、彼らも一つの民族であるというふうに言っていました。

一九四五年八月一五日、日本が敗戦をしましたね。

はい。

日本の敗戦は、いつ、どのようにして敗戦したのか。

スピーカーで放送しましたので、それを聞きました。

それは、どこで、どういうときに聞きましたか。

その当時、私は青森の野辺地というところ、すごい山奥なんです、その松の木を切る、丸太を切る作業をしました。丸太をそこから野辺地の駅前まで運ぶ作業だったんですが、ちょうど、それを運んでいたとき、三沢に戻るようにと言われました。

三沢に戻るよいうにというのは、なぜ、三沢に戻るんだというよいうな話はあったんですか。

そのときは、その中身は聞いてないですが、とにかく、三沢に、もとの部隊があるので、そこに戻れということですよ。

それで、三沢に戻って、三沢で日本が敗戦したことを聞いたということになるわけですか。

はい、そうです。

日本の敗戦ということを知っていて、あなたはどう思いましたか。

最初、その話を聞いたときには、ぼうっとしていました。で、朝会

のときに、海軍の隊長の人が、その話を知らせてくれたんですが、あなたたちは解放されたと、ところが、日本は敗戦したという、あなた方はこれから故郷に戻れるんだという話を涙を流しながら言うてくれました。ところが、あんまり、うれしさを外に出すということとはなかったんですが、というのは、同じ一つの民族だということがありましたので、で、一方、涙を流してる姿を見ると非常に残念というか、かわいそうだなという気持ちで聞いてました。

その後、作業はなくなつて、朝鮮に帰ることになつたわけですね。

はい。

朝鮮に帰るということについて、大湊に行くようにとかいうような話は、だれに言われましたか。

その部隊長から聞きましたけれども、大湊に行けば、朝鮮に行く船があるというふうに聞きました。

それで、大湊に行ったわけですね。

はい。

大湊に着いたのは、何時くらいですか。

多分、昼の一二時半から一時ごろだと思います。

お昼の一二時半ごろに着いて、すぐ浮島丸に乗船しましたか。

もちろん、すぐには乗れませんでした。というのは、まず、そこに乗るのは、当時、青森近辺に住んでました朝鮮人の家族がたくさんいましたので、彼らが優先して乗って、その後、一番最後に我々は乗るんだというふうに中隊長から言われましたので、分隊別、そして、小隊隊列で秩序を保って乗るように、そうしないといけないというふうに言われました。

中隊長というのは朝鮮の人ですか。

朝鮮人なんですけれども、カラカワという、朝鮮の名前でイ・ペクチョンという中隊長です。

最終的に、浮島丸には、乗務員を除いて、何人くらいの方が乗船していたと思いますか。

船に乗った後に、このカラカワ中隊長から聞きましたけど、この船

は五、六千人くらいで満杯になるのに、七五〇〇人から八〇〇〇人くらい乗っているということを書きました。

結局、船に乗ったのは何時くらいですか。

四時半から五時ごろに乗ったと思います。

夕方ということですね。

はい。その後、夕食で、おにぎりをもりましたので、多分、そのくらいの時間だと思います。

船長だとか、乗務員、これは何人くらいいたと思いますか。

これも中隊長から聞いた話なんですが、船長と乗務員はすべて海軍の人だったんですが、一五〇人くらい乗っていると聞きました。

事故前後の状況について伺います。あなたは浮島丸は朝鮮に向かっているというふうに思っていましたね。

ええ、最初乗ったときに、朝鮮に連れていってくれると言ったので、そういうふうに思いました。

うふうに気付きましたか。

何かおかしいと気付いたのは、普通に朝鮮に向かったならば、海しか見えないはずなのに、陸が見えてきましたので、何かおかしいというふうに気付きました。そして、人の中で、うわさされたのは、この船は水が足りないので給水しないといけないということも聞きました。

陸のほうに近づいてから、船長ら乗務員が金さんに対して何か言っていましたか。

陸に近づくにつれてですね、様子がおかしいなと思ってましたが、乗務員が何か分からないですけれども、とにかく、海軍の人だというのは覚えていきます。海軍の人が来て、おまえたち、船の中に入れと言われたので、なぜかと聞いたら、これから秘密会議をしなければいけないんだと言われました。

船の中に入れというふうに言われたということですから、そのとき、あなたは、どこにいたわけですか。

船の中に入らないで、彼らが集まるくらいの場所を開いてやりました。

船の中に入れというふうに言われたとき、あなたは、そのとき、どこにいましたか。

甲板の上に、ボートを出す空間があるんですけど、その辺に座っていました。

もう一回聞きます。陸地が見えてから、海軍の人に船の中に入れと言われたという話でしたけれども、そう言われたのは、あなたが、どこにいてるときですか。

甲板の上なんですけど、船長室の裏です。

船の前、後ろ、真ん中というようなことで言えば、大体、どちら辺になるわけですか。甲板の上でも、いろいろあると思うんですが。

真ん中くらいのところですよ。

真ん中辺りの船長室のある辺りの後ろ辺りということですか。

の辺りです。

船の中に入れというふうに言われて、それから、あなたはどうしたということですか。

私たちが場所を広げてやったところに、海軍の兵士が二、三十人くらいいまして、で、多分、上の一番偉い人がウイスキーの箱を持ってきて、一人一本ずつ配りました。

秘密会議をするということでしたね。

秘密会議をやるといつて、数分間、ちょっと、しゃべって、その後ウイスキーを配ったりしました。

あなたは、船の中に入れと言われたけれども、船の中には入らずに、それを甲板で見てたということになるわけですね。

はい、そうです。甲板の上にいました。

それは、船の進行方向を向いて、甲板の右側にいたのか、左側にいたのか、どうですか。

左側です。

あなたは、乗務員らがお酒を飲むところを、その後見ていたということになるわけですね。

はい、見ました。

その後、どんなことがありましたか。

ほかのことは覚えてないんですが、とにかく、その後、その海軍の人たちがボートを下ろしていることを見かけました。

それは、お酒を飲んでいたその海軍の人たちが、今度は、ボートを下ろすということをしたわけですか。

はい、そうです。

ボートを下ろすということですから、そのボートには人が乗った状態で下ろすわけですか。

乗ってない状態ですね、甲板の上のボートを下に下ろしてしました。

ボートを下に下ろしてたのを見たということですから、その後、どうな

そのとき、船も止まらない程度で、非常にゆっくり行ってましたし、ボートを下のほうに下ろしてましたので、何かおかしいなと思いましたが。

何かおかしいということで、それで、あなたはそのボートの様子などを見てたわけですか。

おかしいと思って、ボートを下ろす作業を見つめていましたけれども、それを見てるうちに、パンという音がして、爆発音が聞こえました。

その音は、どこから聞こえましたか。

船の甲板の下のほうから。

船の前、後ろ、真ん中ということであれば、どこですか。

その爆発音とともに、人が飛んだり、それから水に落ちたりすることも多かったんですが、正確に、どの辺で爆発音がしたかというのは知らないんですけれども、とにかく、中から爆発音が聞こえたというのを覚えてます。

爆発音が聞こえたそのときですけれども、ボートにはだれも乗ってなかったんですか。

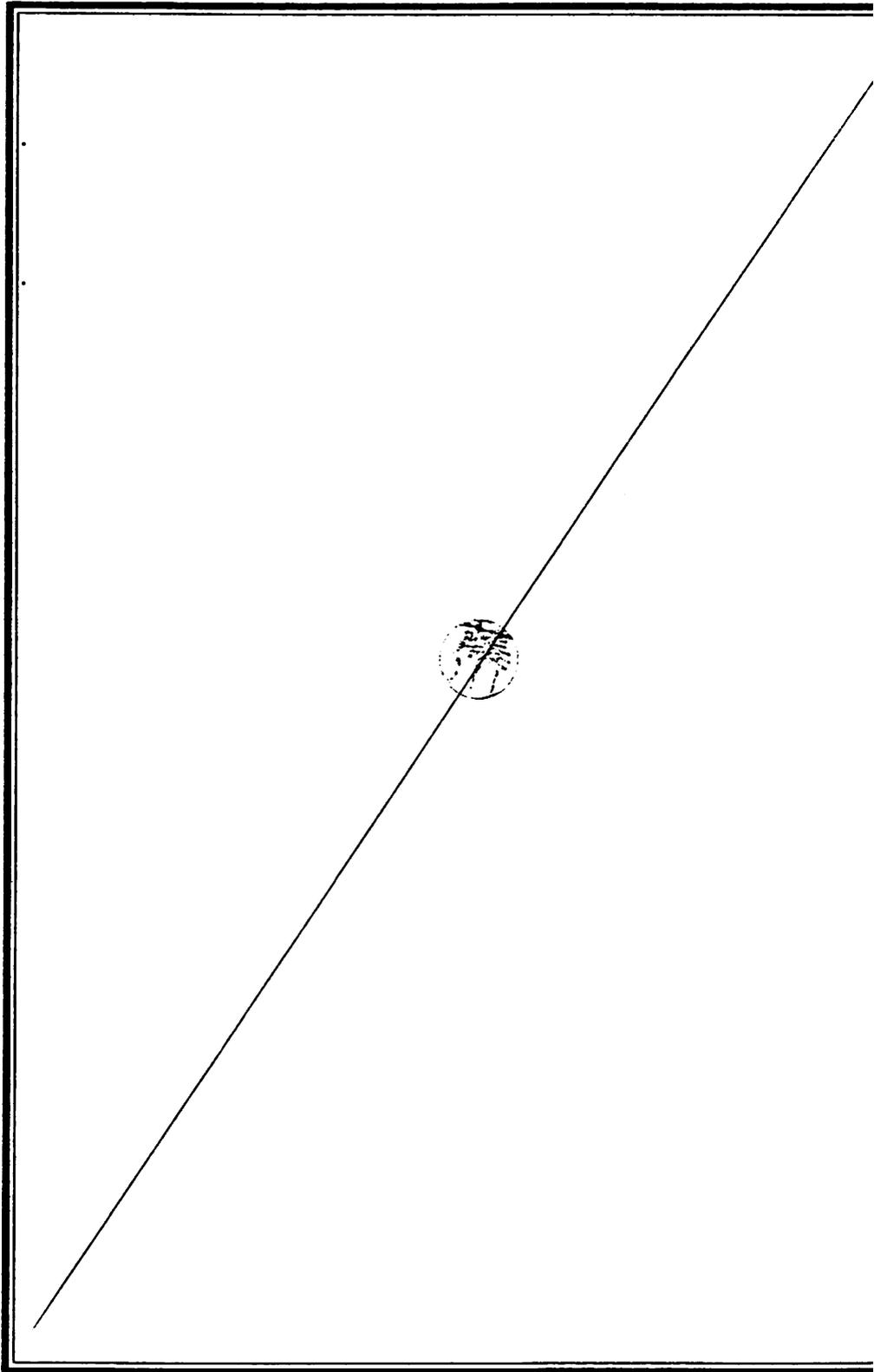
その音で気を失ってしまったので、ボートが水に着くところで爆発音が聞こえたので、それから瞬間気を失ってしまいました。

そしたら、そのボートに、結局、人が乗ってるところというのは、金さんは御覧になってないわけですか。

それは覚えてません。乗ったか乗ってないかというのは分かりません。

金さん自身が御覧になったボートというのは、浮島丸から下ろされたボートというのは、一つだけですか。

私が見たのは一つのボートだけだったんですが、ほかの人から聞きますと、また違う場所で、それぞれ、みんな、ボートを下ろす光景を見てると聞いてます。



原告ら代理人（松本）

他の人の話では、他にもたくさんボートを下ろしてたということですが、それはその後になって、朝鮮に戻ってから聞いたということですか。

それは事故が起きたその翌日、いろんな同じ故郷の人としゃべる機会が多かったです、そのときに、いろんな人から聞きました。

金さんは、爆発音がして、一瞬気を失ったようになったわけですか。

はい、そうです。

そしたら、爆発音がしてから助かるまでなんですが、どういうふうにして助けられましたか。

爆発音がして、私の近くに、船の煙突が壊れて、それが倒れたので、煙突の下敷きになって、数十人が血を流してるのを見ました。

それでその後、金さんはどうしましたか。

その後、船に乗ってる人からは、爆発したので、後、火事になるから、海に飛び込むようにと言われましたが、私は泳ぎができないので、船が沈むまでは可とか船に残ろうと思って、その罨みたいな大きな

のがありましたので、それをつかんで、最後の最後までこれをつかんでいよう、と書いていました。

で、船は徐々に沈んでいくわけですね。

ええ、真ん中のほうから沈んでいくような様子でした。

金さんは、大体真ん中辺りにいたんではないんですか。

真ん中辺りでしたけど、とにかく生き残ろうと思って、自分が着てた服はすべて脱ぎ捨てて、その後、縄をつかんでいました。

縄をつかんでると、どうなりましたか。

それをつかんでたら、回りで中隊長のイ・ペクチョンという人が、生きてて、ああ、あんたも生きていたのかと、二人でお互いに生きてるということを確認してました。そして回りはみんな朝鮮語で、助けて、という声がかかり聞こえました。ところが回りは、全然助けようという気配がありませんでした。で、約三〇分経過したと思うんですが、爆発からですね、それで海軍の兵隊がラッパを吹いたら、その後、回りにいた、多分漁船だと思うんですが、その船が寄って来ました。

で、その船に助けられたということですか。

最初はまず海に入ってる、生きてる人を救助して、その後、船の上にいる人を救助してくれたので、その後救助されました。

そして助かって、その助かった翌日、朝鮮の同じような出身の人が集まって、話をするといいこともあったんですか。

救助されたのは、五時半から六時の間だったんですが、すぐく喉が乾いてたので、水をくれと言ったら、回りの人は、ここで水を飲んだら死ぬから、やめてくれというふうに言われて、水は飲めなかったんです。で、同じ故郷の人がおるかと思われてたら、私の隣の村で、三人が同じように船に乗ってたんですが、一人は生きてて、お互いに生存を、生きて会うことができたんですが、残りの二人を捜してたんです。そしたら二人の内の一人が、そこに油だらけになって、黒い死体みたいになってて、生きてるかと思って、手を口のほうに持っていったら、まだ息があったので、その人を助けることができたんです。

さっき、話に出てたポート、他にもたくさん浮島丸から下ろしてたといい話を

したのは、今話をしてた、同じ故郷の人三人の中の一人、ということになるわけですか。

ええ、まあその三人からも聞きましたが、他の人からも聞きました。そしたら、金さんと同じように助けられた人が、何人かまとまって集まってたわけですか。

一人を救助して、病院に送った後に、我々は米原にある海軍の軍隊庁に收容されたんですが、そのときにみんなが集まったので、話す機会がありました。

舞鶴じゃなくて、米原で、助けられた人がたくさん集まってたということですが、その中で、浮島丸爆発の原因について話が出ましたか。

原因は知らなかったんですが、多分わざとやっただろう、というのは、みんなの声でした。

それはその理由については、みんな、どういうふうに言っていましたか。

何であったか知らないけど、とにかく、我々を殺そうとした、というふうに思っていました。

その米原では、いろんな、同じように助けられた人が集まって、みんなが、これはわざと日本軍が爆発したんだ、というふうな話が出てたということですね。

はい、そうです。みんなでそういうふうには話してました。

そういう話をする中で、ボートがたくさん、浮島丸から下ろされているのを見た、という話も出た、ということですね。

はい、そうです。ボートを下ろしてる姿を、いろんなところで見かけたので、自分たちだけ助かろうということだと、みんな言いました。助けられてからあなたは、舞鶴から米原に行って、その後、仙崎から船に乗って朝鮮に帰りましたね。

はい、そうです。米原の軍隊庁に一五日間くらい滞在しました。で、朝鮮に帰ったのは、助けられてから大体どのくらいたった後ですか。

約二〇日くらいかかったと思います。

それでああなたは朝鮮に戻った後、永同の自宅に戻りましたね。

自宅に着いたときの気持ちとは、とんな気持ちでしたか。

とにかく恥ずかしい思いばかりでした。日本に行って働いて帰ったのに、服もちゃんとなくて、お金も何にもなかったなので、非常に恥ずかしかったです。

で、それからまたあなたは、お父さんお母さん、奥さんと農業をするようになったということですか。

はい、そうです。

あなたが永同に戻った後、永同で、浮島丸の生存者のどなたかと話をするといいことがありましたか、浮島丸について。

ええ、ありました。

だと、特に話をしましたか。

この話を回りにいる人と話したりしました。村の人にも、浮島丸のことを言いました。

先ほど話に出てたイ・ペクチョンさんは、永同に住むようになったんではないんですか。

もとの生まれは、忠清北道の沃川の出身なんです、その後永同に住むようになりました。

そのイ・ペクチョンさんと金さんとは、永同で何度もお会いして話をしたりすることがあったんじゃないですか。

ええ、よく話してます、うちにもよく遊びに来てました。

イ・ペクチョンさんはこの人は、永同の他の生存者のところにも行ってるようでしたか。

ええ、その近所に住んでる人には、同じ永同郡の人には会ってました。何人くらいですか。

生き残ったのは、約二〇人くらいだと思います。

金さんの知ってる限りでは、二〇人くらいだろうということですか。

はい、二〇人から三〇人くらいだと思います。

そのイ・ペクチョンさんと話をして、この人は日本語もできる人なんですか。

非常に日本語が流暢で、日本人みたいな人でした。

この人が金さんたちを引率してた、ということになるんですね。

はい。

で、そういうまとめ役をしてタイ・ペクチョンさんの話で、浮島丸はなぜ爆発したのかということについて、イ・ペクチョンさんはどのように言うていましたか。

彼も私もそうなんです、人には、わざとやった、というふうに言うていました。

あなたが朝鮮に戻った後、朝鮮の中で、浮島丸について真相の究明だとか、慰霊祭をしたりするよう、そういう集まりが、全国にできたんですか。

はい、そうです。

それはいつごろから、そういう集まりができるようになってきたんですか。

私がこの組織があったというのは、九一年度の永同新聞に掲載されて、みんなが分かるようになったんですが、その前も各地方に組織はいろいろあったようなんですが、私が組織があったというのは、九一年の

後です。そのときに永同新聞の朴揆用という新聞記者ですが、その人と編集局長が来て、浮島丸事件のことを聞かれたんで、今言うてるように、彼らにいろいろと申し上げました。

そういう組織がいろいろ、永同新聞に載るまで、既にそういう組織が集まりが全国にあったということですが、そういう集まりの中では、浮島丸の爆発の原因については、どういうふうなことが言われていましたか。

その組織によっては、はっきりとした原因は、知らないところもありました。

一般的に言われてるのは、どういうことが言われてたんですか。

その当時、団体の人、浮島丸事件以外の被害のこととか、日本に連行されたとか、そういう話をしてました。

それであなたは、南憲兵の話聞いたことがありますか。

はい、そうです。

これはいつごろですか。

たれから聞きましたか。

キム・ドンヨンさんという人から聞きました。

どんな話を聞きましたか。

キム・ドンヨン氏から聞いた話では、南憲兵から聞いたという話なんです。彼は南という名字なので、海軍の兵隊さんは彼を日本人だと思っただけです。で、この船は朝鮮に向かわない、途中、どこかで無くなると。爆発される、という話ですね、そういう話を南憲兵に言ったことを、キム・ドンヨンさんが言うておりました。

南憲兵が海軍の人から聞いたと、そういう話を聞いたということ、南憲兵からキム・ドンヨンさんが聞いたと。その話をキム・ドンヨンさんから金さんが聞いた、ということですか。

はい、そうです。

それからその後、最近、田在鎮さんという人から、浮島丸について話を聞きましたか。

先ほどの田在鎮さんの話ですが、彼とはたまに会ってるんですが、今

年の五月に日本に行きました。今まで日本に八回くらい来ているんですが、今年の五月に日本に来たときに、その当時、浮島丸に乗ってた船長といいますが、多分乗務員と思うんですが、乗務員でいた人で、東京にまだ生きている人がいまして、その人に尋ねて、話をいろいろ、その当時のことを率直に言うてもらえないかということで、尋ねて行きました。行ったら、最初は全然黙ってて、何も口を開けてくれなかったんですが、もう五〇年も過ぎたことだし、お互いに感情というのはもうないと。だから正直に言うてくれないかということで、重い口を開けたのが、実は、この船は青森を出発する前から、もともと朝鮮に行くつもりはなかった、ということと、最初から、爆発が仕掛けられていたということとを、その乗務員の人から聞いた。その話を田在鎮さんから聞きました。

韓国では、浮島丸事件のことを知ってる人は、たくさんいますか。

たくさん、知っています。ソウルのKBS放送でよく取り上げたりし

送にも出ています。それについては、みんながいいことだとは思っていません。浮島丸事件については、五〇年前のことではあるんですが、あれは決してよくは思っていない。

どういう点が、特によくないというふうに言われていますか。

三年間日本のために働いたのに、そういう人をちゃんと帰さずに、途中、船の中で殺害しようとした、あまりにも悪質で悔しく思っております。

事件後、五〇年以上たってるわけですが、その間に、今まで日本政府から浮島丸事件について、説明を受けたり、謝罪をされたり、補償を受けたりしたことはありましたか。

謝罪も受けておりませんし、補償を受けたということも聞いておりません。説明も受けておりません。

最後にこの場で、裁判所に何か言いたいことがあれば、言ってください。

人間ではない獣を、例えば船に乗せて、そうやったとしても非常に悔しいのに、人間をそこに入れてそうやったと。しかも我々は三年間も

働いたのに、ちゃんと帰してくれない。真相は大体分かっているのに、何でこんなに長引かしているのか。それが理解できません。法廷にいらっしゃる皆さんは、詳しいことは知らないかもしれませんが、真実を明らかにしてほしいと思います。早くこれを解決してもらえないと、私どもは私の息子、そして私の孫にも、この悔しさを伝えると思います。人間同士がお互いに敵になることはあっても、死ぬまでそうしないとします。内鮮一体と、一つの同じ民族だというふうに思わなかったら、我々はここに来て働くこともなければ、逃げたと思いません。そういう我々を殺害しようとするのは、どういうことか、ということは、皆さんも分かると思います。今でも日本と韓国は隣国ですから、過去のことは素直に認めて、それを謝罪して、それを解決して、これから将来、仲良くしていくべきだと思います。人間はみんなが同じ人間だと思います。人間は人間だからみんな同じだと思うんですけど、私が昔日本にいたときに、米軍の捕虜が捕まえられてきた人がい

あります。我々は生き残っていますか。五四年過ぎた今でも、亡くなつた人の骨は舞鶴の海の底に沈んだままです。今でも遅くないから、真相を究明して、死んだ人のためにも真相を究明して、この悔しさの半分以上でも晴らしてもらえたら、と思います。その遺骨を含めて、東京のお寺に納まつてる五〇〇の遺骨がありますが、それも一緒に韓国に持って行きたい、そして死んだ霊だけでも、朝鮮の土地で安らかに眠るようにしてもらえたら、と思います。繰り返しますが、真相を明らかにしてほしいです。そして遺骨と、舞鶴に建てられている慰霊碑さえも、韓国に持って行って、韓国で、彼らのために慰霊祭ができるようにしてもらいたいと思います。言いたいことはいっぱいありますが……。我々が日本の舞鶴まで来て、慰霊碑まで来て、慰霊祭をやるのも、毎年やるのは大変ですし、子孫たちがまたやるのも大変ですので、できれば日本の政府が責任持って、東京の祐天寺にある遺骨と慰霊塔は、韓国に、ちゃんと日本政府が土地を確保して、韓国でその場所を確保して造ってほしいと。その子孫たちが、そこで慰霊祭

ができるようにしてほしいと思います。

裁判長

反対尋問、ありますか。

被告指定代理人（岸）

いません。

京都地方裁判所第一民事部

（以上 山口庸子）

裁判所速記官

藤川照

見



裁判所速記官

山口庸

子



